

我は張遼！

ふごふご蘭子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋姫張遼に憑依した現代人が好き勝手やっていく話。

目次

一話	プロローグと張遼	1
二話	居酒屋と猫耳フード	9
三話	居酒屋と猫耳フード その二	15
四話	陳留と張遼	24

一話 プロローグと張遼

俺には幼い頃から様々な記憶が存在していた。何が言いたいのかというと、俺には前世の記憶というものが残っているのだ。

前世、21世紀の日本という国で俺は生活していた。

そこは水道、電気、ガスなど、日常生活において必要な物が当たり前存在していた。教育機関や医療機関も発達しており、食べ物も沢山あり、飢餓なんて言葉とは無縁の国だ。

生まれも育ちも日本だった俺はその事が当たり前の事だったのであまりその事を印象的に思う事はなかったが、何の因果か俺は平和という言葉とは無縁と言つてもいい。三国志の世界に生まれ落ちた。

その事実に至った時は混乱し、そして状況を理解するにつれてどうしてこうなった。テンプレ乙 などという考えはいつの間にか地平線の彼方へと吹き飛んでいた。

そして今後の人生設計が脳内で構築されるに当たって生まれた感想はただ一つ。

俺TUEEキタ——！

今思えば唯のアホではあったがその時の俺（の妄想）は只管に無敵であったのでそれ以上の感想が出る事はなかった。

そして、そこに至るまでの要因は俺の名前だ。俺が物心ついた頃、というより自分の名前に疑問を持ったその瞬間に、前世の記憶を思い出したのだ。

生まれた頃から使っている名前であるので、疑問を持つという事が出来ず、自分の名前を聞いても変な違和感を感じるといふ妙な感覚だけが残っていたのだ。

しかし、疑問を持てば後は簡単だった。

データを吸い出す様に頭の中に前世の記憶が流れ込み、そして思い出したという結果である。

思い出した後は、所謂知恵熱というものが出てしまい両親やマイブラザーを心配させてしまったが、1日寝たら完全に回復していた。俺という武將は本当の歴史では病死、演義では矢傷が元で死んでいるので少々身体は大丈夫なのか心配していたが、結構丈夫っぽい。寧ろ前より丈夫になった気さえする。

さて、病死と矢傷、というニュアンスで伝わった人もいるかもしれないが、俺は張遼として生まれ変わったのだ。あまりにも有名人過ぎて混乱するのは仕方のない事である。倒れなかっただけでも褒めてやってほしい。

それに何の為にあるの？ と未だ非常に疑問が残る。 真名なる謎も存在していた。なんでもその名前を勝手に呼んだら殺されても文句は言えないらしい。物騒過ぎて何と言えれば分からない。

そして記憶を取り戻して一週間目、ようやく気付いたが、この世界は三国志に似た何かだ。はつきりとは言えないが、俺が元いた世界の過去ヘトリップした訳ではないだろうと思う。恐らくは三国志というジャンルの何らかのゲームかアニメの世界だろうと睨んでいる。

だってみんなが話してる言語日本語だぜ？ なんなら俺が話す言葉なんて自動的に関西弁になるし。流石に文字はしっかり漢文なんだけどね。恐らく日本の作品だからそういう仕様なんだろう。それ以上は言ってはいけない、というやつである。俺にとっては有り難いだけであるが。

そして最もたる要因を上げよう。だがその前に至極当たり前の事を提示させてほしい。歴史上の張遼は紛れもなく男だ。確実に全世界中何処を探しても「張遼は女に決まってるぜ！ このタコ！」などという人物は存在しないだろう。

だが、俺は女だ。俺は女だ。大事な事なので二回言いました。どういう事だつてばよ。訳が分からないよ。

思わずネタのオンパレードが開催されるが、それ以上に俺の理解が及ばなかったのだ。ゲシユタルト崩壊しそうな勢이었다。まあ、今

となつては最早ドブに捨ててもいいくらいどうでも良い事となつたわけであるが。それに今の俺は女の身体を色々な意味で知り尽くした状態なので何ら問題はない。

しかし、一つだけこの出来事によって問題が発生してしまった。それはこの世界がギャルゲー、もしくはエロゲーの世界なのではないかという問題である。

俺が……ヒロイン、なのか……？　　ヒーローは差し詰め丁原、董卓、呂布、曹操、曹丕と言ったところだろうか。どういうゲームだよ。ここまで展開が読めないストーリーというのも中々無いぞりまあ、仮にそうだとしてもヒロインなんてやる気一切ないから関係ないけど。ちなみに俺の真名は霞かすみと書いて霞しあと読むらしい。この字口頭で伝わつたらその人天才だと思ふよ。

話は打つて変わるが、俺は張遼としてカツコよく生きていきたいなと考えている。俺の知ってる張遼といえば蒼天航路では非常にカッコいいし、三國無双でも非常にカッコいいし、俺の中ではとにかくカッコいい完璧キャラだ。

それに正史ではリアル三國無双をしている武将だったとも言われている。演義より正史の記述の方が派手という稀有な将、それが張文遠。

そんなすごい人に俺は生まれ変わった俺がやるべき事はただ一つ。

そう——特訓あるのみ！

☆☆☆

「そして現在に至る」

「文遠殿、どうかなされたか？」

「ただの独り言や」

俺は本来なら郷里である？州の刺史、丁原に仕えるべきなんだろうが、どうせ仕えるならもつと将来性がある奴に仕えたいと考え、客将

として雇ってもらおうと思っている。その為、現在は色々なところを旅していると言うわけだ。

だって丁原とか呂布に裏切られて殺されて終了ですよ。そして董卓、呂布、そしてようやく曹操。過程が辛過ぎる。

もう少し自由に尚且つ適当に名を上げていきたいという俺の我儘な願望だ。こんな言い草ではあるが、悩みに悩んで出た結果なのだ。俺は少々名のある武家の次女。長男がいるので跡取り的な問題は無かったが故に生まれた選択である。

もちろんこの旅に出たのは鍛錬をある程度終えての上での行動だ。それはそれは只々きつい日々であった。自分と協力者を携えて作成したメニニューながらも過労死させる気かとすら思えた。しかし俺は「めげないしよげない泣いちゃダメ」のガンコ三原則を遵守し、見事今日まで生き抜く事が出来たのだ。

今は位置的に冀州の常山に入った辺りだと思う。実家がある？州からは近いが、これでもまあまあ旅の期間は長い。賊退治やバイトで日々を凌ぎながらの旅なのでこの世界は戸籍とか履歴書とか面倒なものがないのでバイトの面談も非常に楽だ。そして俺は自分で言うのもあれだが素材がいい。わかりやすく言うなら美人なのだ。程よく付いた女性らしさを損なわれていない筋肉にしなやかに伸びる肢体。それに衛生面も余裕がある時は考慮しているので身なりがいい為、浮浪者とも間違われれないのだ。なので食いつぱぐれる事はほとんど無かった。

ちなみに隣にいるのは最近出来た旅路の仲間である自称~~常山~~常山の昇り竜~~こと~~趙子龍だ。

名前を知った時はびっくりした。だってあの蜀に趙雲ありと言われた趙子龍が女だったのだ。自分を棚に上げて言うが、驚きを禁じ得なかった。

だが自己紹介されて分かった事はこいつもヒロインだと言う事だ。もしかしたら有名どころは取り敢えず女になっているのかもしれない。まだ確信出来る段階ではないのだが。

まだ、一緒に旅を始めて1週間立つくらいだが、武人としても頼り

になるし、話し相手としても面白いから全く暇しない。今のところ関係は良好である。

「しからは文遠殿、急ではあるが一度私との手合わせを願いたい」

「ん、子龍。ホンマ急にどーしたん？」

「いやなに、文遠殿の実力は身のこなしと立ち振る舞いで凡そ把握出来ているが、それ故に武人としての血が騒ぎましてな」

たまに生意気な事を抜かす事があるがそれもまたこいつの特徴であり、面白いと思える要素だ。

しかし、今回はあれだ。久々にキレちまったよ……という奴だ。少しだけカチンときた。この小生意気な小娘に身の程という物を知らしめなければならぬ。

我が血と汗と極稀に涙ありの鍛錬で作り上げたこの魔改造俺を見せてやろうぞ！

ふふふ、この俺が人生の先輩として後輩に指導をつけてやる。

歳で言えばだいたい同じだが、前世を合わせると親子くらいの差があるのだ。

「ほほう、この張文遠の実力を把握しとるっちゅーんか。なかなかおもしろい事言うやんけ。ほな、早速始めよ……かい!!」

その言葉と同時に己の得物である偃月刀——飛竜偃月刀——を手に取り右斜め上からの振り落しの一撃を放つ。

それを予測していたのか、子龍はその一撃を己の愛武器——龍牙——により受け止めようとするが、その重く鋭い一撃を受け止めきることは出来ないと察し、すぐさま後方へと下がる。

しかし攻撃自体は避けきれておらず、子龍の頬からは鮮血がツツと流れ落ちていた。

——後一瞬でも行動が遅れていたら、確実に殺られていた——。

そう悟り、子龍は知らずのうちに存在していた慢心と油断を捨て去り、張遼が自分より格上の存在だという事を確信する。

しかし、子龍もたったそれだけの理由で負けるわけにはいかなかった。

子龍は先ほど見当違いな事を言った事実を恥じ、それを糧とした。

今度こそはと張遼の実力を見極めようと意気込む。それと同時に武人としての意地を見せてやると心の中で小さく付け足し、薄く笑みを浮かべる。

「——ッ……ふっ、なかなか気の早い御人のようだ」

「うちの一撃くんの分かつとった癖によーゆーわ」

「いやいや、中々の鋭い一撃でしたな。これを躲せる者は早々おらぬと思いますぞ」

「なんや、うちを褒めとんのか自画自賛なんかよー分からんけど……まー、うちも子龍ならなんとかなるやろーつちゆー信頼があつてこそその不意打ちなんやけどな」

「ほう、文遠殿の中の私は結構な高評価と見える」

「そらーなー、あんた程の武人はそう探してもおらへんよ。……あー、褒めあいみたいでなんかむず痒いわ」

「もう勝った気でおられるのか？　ふふ、勝負はまだ始まったばかりであろう。さあ、次は私からいかせてもらおうか」

「おう、いつでもええで」

「ならば——我が槍を受けてみよッ!!」

子龍は熟練された、風を掻き切るような攻撃を一撃、二撃、三撃、それ以上を繰り返し、急所を的確に狙いながら連続で突きを放つ。

当たったらひとたまりもないどころか致命傷にもなりかねないが、冷静に偃月刀の柄で防いでいく。数撃目で刃に沿うように子龍の間さえ切り裂く様な突きを反時計回りに受け流し、その流れを利用して得物を弾き飛ばす。

「そらあああッ!!」

「なッ!？」

あまりの常識外れな行動により思考が停止した隙を見て、偃月刀を子龍の首元に添える。その後首元から離し、試合は終わりだと言わん

ばかりに得物を背中に背負い直す。

「ふう……これで終しまいや、なかなかええ攻撃やったで」

子龍は少しの間呆然と立ち尽くしていたが、やがて気がつくどハツと目を見開いた。

「……ふっ、完敗です。至高の武というものを垣間見た様な気さえした。どうやら私は驕おごっていたようすな。まだまだ鍛えが足りませぬ」

「ふっふっふ、やろ？ そないなこと言われたら鍛錬してきた甲斐あるわ。……せやけど、うちもまだまだや。まともに手合わせなんてやんのも初めてやしな」

子龍は少し驚いたような表情を浮かべると、なんとなくイヤらしい笑みを浮かべた。

「ほほう、文遠殿は私と初体験を済ませたという訳なのだ。私のもので満足頂けたかな？」

「んー、まあ、俊敏さや目はいいもんもつとる。やけど反撃に対する反応と対応はもうちよい鍛えた方がええなー。ま、それは経験やから今すぐどうにかなる奴でもあらへんによつて、経験積んでいくしかない。槍術に関しては特に言える事はないわ。専門外やし」

「……ふむ、御指摘感謝する。今後精進しよう」

その意味深な言い方が態とだと分かっていた俺は、敢えて反応を見せずに返事を返す。それにより子龍は少し不満気な顔になるが、指摘は素直に受け入れていた。

俺が指摘した部分に関しては恐らく手合わせの最中に自分で気が付いていたのだろう。自分の欠点に気づく事が出来るというのはあまりできる事ではない。

こいつは更に強くなるだろう。

「ほな、そろそろ歩かんと日暮れるまでに次の街につかんくなるわ」
「む、それは頂けない。そろそろメンマを口にしないと武器が持てなくなる」

「……お、おう」

かろうじて反応を返す事が出来たが、俺は何とも言えない気分

なつた。

確かにメンマは美味いがそれ単体で食べるようなものでもない。
い。

そんな気持ちのまま歩みを進めようとすると、子龍から待ったがかかる。どうしたと思いなながら子龍へと身体を向けると、先程までの飄々とした態度は打って変わり、真剣な表情で口を開く。

「文遠殿。貴女に我が真名、星^{せい}をお預けしたい」

これは俺が子龍に信頼されていると受け取っても良いのだろうか。真名なんて家族以外に教えたことないから、匙加減というものが分からない。

しかし、わかる事は一つだけある。それは真名という物は命と同等の価値があるという事だ。言うなれば真名を預ける行動は命を預ける事と同意と言つても過言ではないのだ。

そう考えて来ると聞くまでもなく分かる。彼女は俺が信頼に足る人間だと認めてくれたのだ。……暖かい。真名を授かるという事はこんなにも暖かいものだったのか。

「……うちの真名は霞や。これからもよろしゅうな——星」

「うむ、此方こそよろしく頼もう——霞」

真名を交換した後、本当に時間が無いことに気が付いた俺たちは小走り気味で道を急ぎ、ギリギリ門が閉じる前に入ることが出来た。なんとも締まらないものではあったが、それ以上に今日はいい日であった。

宿をとつたら早めに寝よう。

なんだか今日はぐっすり眠れそうだ。

二話 居酒屋と猫耳フード

次の日の朝、俺たちは朝っぱらから居酒屋に来ていた。星曰く、情報収集するなら人が集まる居酒屋が最適らしい。朝から居酒屋に人がいるわけねーだろ、と思わなくもないが特にやることも無いので付き合う事にした。

宿を出たところでどこに居酒屋があるのかと問うと星は俺の手を引きすいすいと人混みの中を避けながらあつという間に酒場に到着してしまった。

「この趙子龍に抜かりはない」

との事らしい。恐らくただ酒を早く呑みたかっただけだろう。昨夜にこの居酒屋の事を今俺たちが泊まっている宿主に聞いたんだとか。まあ、路銀は賊退治の依頼や飯屋なんかで短期で働いたりしていたので余裕はだいぶある。しばらくは大丈夫だろう。星だつて居酒屋行こうと言うくらいなので払う金は持っているはずだ。

俺の予想は当たっていたようで、星は着いて早々酒とメンマを壺ごと頼んでいた。壺つて……壺つて……

ちなみにパツと見たところやはりと言ったところか客は俺たち以外に存在しなかった。早速抜かってんじゃねーか。星に情報収集する気が無いのは確実となった。

そんな事を思いながら壺の中身がどんどん消えてゆく様子を呆然と眺める。

「……ん？　なんだ、霞。我がメンマが欲しいのか？　それとも、

私の美しい横顔に見惚れていたのかな？」

「……あんた、そうゆうの好きやんな」

「いや、霞の反応が薄いからな、しつこく言っているだけの事」

「……さよけ」

まさかガン無視が逆に仇になっていたとは。しかし、ここで星の望む反応をしたらなんだか負けな様な気がするので今後もオールスルーでいこう。

「しかし、そろそろやめないと年がら年中誘っている尻軽女だと思われてしまうな。それは不本意だ。……ふむ、霞よ。今後私はお主にどう接近すれば良いのだ？」

「うちに聞いてどうすんねん……そないなこと思うとらんから安心せい。あと、気にしとるんやったらやめーや」

「それを聞いて安心した。今後も諦めずに続けよう」
「だからやめんかい!!」

俺がツツコミを入れた後、星は急に顔を俯けると心底愉快だと言いたげな含め笑いを始めた。その後ゆっくりと上げた顔は、いつもの得意げな表情が更に得意げになっていた。

これを通称ドヤ顔という。

「ふふふ、霞、まだ気付かぬのか？」

「な、何ゆうて……ハッ!!」

「くくく、ようやく気が付いたか。そう、霞は既に我が掌で裸踊りしていた、という訳だ」

や、やられた……完敗だ……。

星の言葉に乗らないようにと気をつけていたはずが、無意識にツツコミを入れていた。裸踊りのチョイスは謎ではあるが。

俺は自分の顔が羞恥で赤くなっていると自覚した。同時に苦虫を噛み潰したような表情をしているだろう。それと並行して星の顔はどンドンしてやったりという顔になっている。

「おやおや、顔が赤いではないか。風邪でも引いたか？ んん〜？」

「……ちっ」

くそ、整ってる顔なだけにこのドヤ顔が凄まじくムカつく。正にドヤ顔するためにあるような顔の作りである。だが、今回は……今回だけは甘んじて受けてやろう。いつか必ず何らかの形で復讐してやる。

「覚えとれよ、星」

「ふっ、負け犬の遠吠えにしか聞こえぬ」

「ぐわーッ！ こいつムツカつくうー!!」

俺は思わず気持ち昂り、店の中にも関わらず大きな声を上げてし

まった。煽りに関しては一級品の物を持っているようだ。

「こ、ここまでおちよくられたの生まれて初めてや」

「はっはっは、褒めても奢らんぞ?」

「なんつも褒めとらんわ!」

「ぬあーッ!! もうッ! さつきからうるっさいわねえッ! 頭に響

くからやめてくれないかしら!!」

「ん?」

「誰かおるんか」

その声を聞いた俺は急激に頭が冷えた。

あれ、俺たち以外に客なんていたっけ?

そう思いながら俺たちは声の聞こえた方向を同時に振り向く。しかし、誰もいない。そこにはガラリとした空席だけが存在を露わにしているだけであった。

「ふむ、飲みすぎて幻聴でも聞こえたかな?」

「まだ言うほど飲んどらんわ。でも確かに誰もおらへんな」

「何が誰もいないよ! あんた達が来る前からずっとここに居たわよっ!!」

未だに何も見えないが声の主がそう言うので、席を立ち、声が聞こえる反対のカウンター席に近付く。すると確かに客はいた。

しかし、その存在はあまりにこの居酒屋に合っていないかった。というのも、先程の声の主は綺麗な茶髪の猫耳っぽいフードを頭に被せている、顔を赤らめた幼気な少女いたいけだったのだ。もっとも顔を赤らめたとってもただ酔っ払っているだけだろうが。何故ならその少女の周りには何杯も飲み干したであろう酒の残骸と料理の皿が散らばっていたからだ。その姿はまるでおっさんのようである。それにちっこいので見えなかったのも納得だ。

「……店主さんや、あんたこんな幼い子に酒なんて出したんかい。流石にマズイんとちやう?」

「失礼ねあんた!! これでも成人過ぎてるのよ!! ……うつ、頭に響いて痛い……二日酔いだわ……」

俺の言葉に反応し、その少女は寝伏せていた身体を起き上がらせ、

凄い剣幕で俺にそう言い放つ。が、キツそうな様子ですぐ俯いた。

しかし、いくら睨みつけようとも見た目がただの可愛い少女なので何を言われようが特に怖くはなかった。むしろ可愛い。

「ぶ、合法ロリやと……!?!」

「何言ってるか分からないけどとても不愉快な事を言われた気がするわ……」

その少女はそう言うと、不貞腐れたかのように俺の方を向いていた顔をぷいと逆の方向へ向けた。その仕草も残念ながら可愛かった。

「その子仕事で一悶着あつたらしく、一晚中ずっと飲んでたんです」

店主さんがそう口を開く。

「ヤケ食いヤケ酒ちゅうわけか」

「……見知らぬ誰かに話す事なんて何一つないわ。店主、余計なこと言わないでよ、あと水頂戴」

「まあまあ、そんなん言わんといてーな。これも何かの縁や。どや、お姉さんに相談してみ？」

俺が私が聖母ですよと言わんばかりの慈愛たつぷりな笑みを浮かべ、少女へと近付いた。

少女は店主さんから受け取った水をゴキユゴキユと可愛らしく飲み干し、何を考えていたのか少しの間空白を作り、話を切り出した。

「……あんな何年生まれよ」

「延熹8年や」

「私は延熹6年……ってことは私の方が年上じゃない!! 何よこの成長の差!! 理不尽だわツ!!」

「い、いや、そんなん言われてもやなあ……」

手に持っていたコップを叩きつけるかのように机に置くと、少女は両腕を枕に不貞寝を始めた。

すると彼女は辛み妬み嫉み僻みといった純粋な負のオーラを醸し始める。ただの嫉妬である。

「ごめんな、俺も別に好きでこんな身体してる訳ではないんだ。君は悪くないよ。」

「……袁紹は莫迦で話聞かないし……ブツブツ……顔良は顔良であれ

だし……ブツブツ……あんな脂肪の何がいいのよ……ブツブツ……貧乳の何が悪いのよ……ブツブツ……」

何やらぶつぶつぶつぶつ言っているが、重要なことは結構聞こえたので悩み事が何なのか大体わかった気がする。

彼女は恐らく四世三公を輩出した名家の中の名家である袁本初の所の文官か何かだろう。そしてその袁紹に色々な策を提案するも相手にされなくて怒っているようだ。後半については俺から彼女に言える事は何も無い。言ったところで嫌味になるだろう。なにせ俺は見た目ナイスバディでクールビューティなお姉さんだからな。

それにこれは彼女の自尊心との戦いだ。彼女が自分の中で折り合いをつけていかなければならない。

……いや、一言だけ言うべき事があったな。

「嬢ちゃん、大丈夫や！ 貧乳は希少価値やで」

「ぐわああ!! あんたが言うのと嫌味なのよ!! それと嬢ちゃんって言うな!! 貧乳っていうなああッ!! うわあああん!!」

彼女は認めたくない現実から逃避しながら泣き叫び、乱暴に扉を開けて出て行ってしまった。その後の空間は、まるで嵐が去ったかのようになんか静かであった。慰めるはずだったこの俺が彼女へ会心の一撃どころか三撃も放ってしまったようだ。

俺は思わず呆然と立ち惚けてしまったが、心の中では流石に悪い事をしたと、罪悪感が生まれていた。しかし、追ったとしても何か出来るわけでもない。

戻ってきたら取り敢えず謝ろう。俺はそう考えて店主さんに注文を済ませ、元の席へと戻る。すると星が腹を抱えて笑っていた。

「あっはっはっは! ……いやあ、なかなか乙な演目であった!

もしかやこの趙子龍を笑わせようと事前にネタ合わせでもしていたのでは?」

「アホ言うな、途中から空気やった癖に」

「……」

俺が先程のお返しとばかりに少し冷たく返すと星は笑っていた顔をピタリと止め、何か考えるように顔を俯かせる。どうやら少し気に

していたようだ。

……そういえばあの少女の名前を聞き損ねたな。

「ま、それも戻ってきた時にでも聞いたらええか」

そう言っつて俺は思案げな顔の星を隣に酒を煽った。

三話 居酒屋と猫耳フード その二

あの後、元に戻った星と暫くの間談笑を続けていると、からんからんと店の扉が開く軽快な音が聞こえた。こんな朝っぱらから酒盛りに来たのかと人の事を言えないような事を思いながらも心の内はきつと先程の少女だろうという答えを出していた。

そして扉の方向を向くとやはり案の定先程の少女である。この店を出て行く前は幾分か赤かった顔もだいぶマシになっており、幼い顔ながらもなんとなく凄腕の文官というイメージを脳内に浮かばせる姿であった。しかし、もしかしたら武官かもしれない、という考えは捨てる事はできない。彼女のような小さな身体でブンブンと大剣を振り回すような子だっているのだ。実際にその様子を間近で見ているので断言できる。それに、なにせ趙雲と張遼が女性になっているんだからな。この世界で見た目は全く当てにならないのだ。

「おう、さつきぶりやな」

「……ああ、あんた、さつきの。悪かったわね、取り乱して。もう落ちて着いたわ」

「いや、うちの方こそすまんかった。悪気はなかってん」
「もう気にしてないわ、私の方も騒がしくして悪いとは思っているもの。これでおあいこよ。店主も悪かったわね。迷惑料払わせてちょうだい」

俺と彼女はお互いに謝り返す。大人な対応で俺の事を快く許してくれた彼女は、本当に気にしてないのか、それともただ単に開き直ったのか。なにせよお互いに蟠りが出来ないで良かった。この世界は一応三国志の部類の世界だ。色々な意味で敵はなるべくなら作りたくはない。

この先に起こる歴史的な出来事はだいたい把握してはいるが、必ずしも同じように動くわけではないだろう。俺という異例もあるし。だから実はこの少女がすごく偉い、もしくは後々すごい人物になる、なんて事もあり得るのだ。世の中何が起こるかわからない。

「ならええわ。うちも気にせんようする。あ、隣座りいや」

彼女が座りやすいように隣の椅子を引いた。

「あら、悪いわね」

「おう。それと、詫びと言っちゃあれやけど、今行きたいとことかあるんやったら、用心棒で雇われてもええで。もっち二人合わせて無料や！ どうせ行く宛もあらへんし、国内やったら何処でもええよ」

「……何故私まで入ってるのか疑問だが……まあ、いい」

星がジト目で此方を睨み付けるのをガン無視していると、諦めたのか溜息をついてやれやれと口にした。

「ふん、悪いけど別にどこの誰とも知れない奴になんか頼まないわよ」

「なんと！ 我等の名を知らないと仰るか！」

「そういう意味ちゃうやろ。……あー、うちは張遼、字を文遠。？州生まれの風来坊や」

「そして私は流離いの美少女武人。 常山の昇り龍” こと、趙子

龍。 その痴女とは違い、紛う事なき正統派美少女だという事は覚えておいて欲しい」

「殺すぞ」

殺意が芽生えたので、とりあえず俺は無防備な脇の下を思いつきり抓った。星の言う痴女というのは俺の格好を言っているのだ。この服装、動きやすいのは良いところなのだが、確かに星の言う通り、少し痴女っぽい。肌の露出が凄いのだ。腹も出してるから偶に冷えてお腹が痛くなるし。それにこの服、きつと防御力0だ。寧ろ肌晒してる分マイナスになるかもしれない。しかしこれ以外の服着て街を歩くと、無性に今の服に着替えたくなくなってしまおうので結局この服に落ち着くのだ。

「いたっ、いたたたた！」

涙目になっていたので手を離すと、恨めしげに此方を睨んできた。その様子を俺は得意げに鼻を鳴らす。

「地味に痛いやろ？」

「……くっ、陰湿な……っ！」

「えっ？ もう一回？」

「言っておらん！」

しばらく言い合っていると、俺たちの自己紹介から固まっていた彼女がポツリと口にした。

「……張遼?」

「待て、何故そこだけ反応するのだ」

彼女は星の言葉を無視し、俺の名前を眩き続ける。確かにかつこい名前ではあるが、そんなに気に入ったのだろうか。

「張遼……張遼……あ、あー! も、もしかしてあんたが 〃武神〃

張遼!」

「ぐっ……よりによってそっちかい……」

彼女は俺の性と字から名を導き出し、正体を見破った。そう、俺にも星の “常山の昇り竜” のような通り名が既に存在しているのだ。

——武神

物騒な通り名だと幾度も思った。

まだ武神だと謳われていることを知らなかった俺が街を歩いていると、皆が俺が通るそばで武神だ武神だと言うものだから呂布でもいるのかと怖がりながら走り去った忌々しい記憶を思い出す。

……ええ、そりやあ怖いですとも!

武神が俺の事を言っていることに気付いた時は呂布がいるのでは無いのかとちよつと安心したのもいい思い出だ。

武神の由来としては、星と会う前までは実力試しと路銀稼ぎを兼ねて賊をとことん狩って狩って狩りまくってたから多分その事が色々と伝わってるんだろう。というかそれしかない。それに賊の中で俺と一合でも張りあえる奴が一人もいなかったから半強制的な無双状態が発生したというのもある。

だが、誰がその事を伝えたのかというのが疑問に残る。いや、俺が傷を負わずに全滅させたと報告したのが原因か。もちろん最初はデタラメ言うとかふざけるとか散々言われた。イラつてきた俺が獲った賊の頭領の頭を投げつけると皆途端に黙ったのは少しスツキ

りした。ここで村人に頭領の顔が知られていなかったらどうなっていたのだろうか、

「……それ、何処で聞いたん？」

「色んな所で言われているわよ。冷酷無残で残酷非道、そしてオマケに嗜虐嗜好。一部では一人だけの百鬼夜行なんて言われているらしいわ」

「ぶふッ」

今笑った星は後でマジ泣かす。

「嘘やろ!?!　うち結構人当たり良いほうやと思つたんやけど……」

「あんたを怖がった他の賊がそんな情報流したんじゃない？　それか思い当たる事はないのかしら？」

「……な、無いわー！」

「今の間は何よ」

多分狩りを行っている最中ネタに走りすぎた所為だろう。どんなネタかは言うつもり無いが。

「ま、まあ改めて、うちは張遼。字を文遠や。んでこつちが相棒の趙雲」

「誤魔化したな……。まあ、相棒とは言われたが実力が伴っていない未熟者ではあるが。……紹介に預かった通り、私の名は趙雲、字を子龍だ。よろしく頼む」

「……片方は『武神』と謳われる張遼、そしてもう片方は『常山の昇り竜』趙雲ってわけ……」

「なんだ、私の事も知っていたのか」

少し嬉しそうな星。しかし、なんだかむず痒い気持ちだ。武神なんて言われると俺の努力が認められてる気がして嬉しいとも思うし、俺には似合わないしと恥ずかしい気持ちもある。それに俺は　「武神」という通り名を一度も名乗った事がない。

「……しかし、武神なんて通り名は今初めて聞いたのだが。……霞、何故隠していたのだ？」

「別に隠しとった訳やない。ただ積極的に名乗ろうとは思わなかった

「だけや。恥ずかしいし」

「いや、霞はその通り名に恥じぬ武を持っている。強ち間違いではないと思うが?」

「……そう?」

「うむ」

流石に自分で武神だなんて紹介をするのは小恥ずかしい物があつたが、星も同意してくれるなら利用してみるのもいいと思った。

今度使おう、我武神張遼也。

今なら春秋戦国時代の趙で三大天にでもなれる気がする! 我

武神龐煖也! あ、違った張遼也!

「……そろそろいいかしら?」

少女は痺れを切らしたのか、俺たちへと催促する。

「おお、すまんすまん! 次はあんたの番や」

「……ふう、私は性を荀、名を彧、そして字が文若。袁紹のところで文官を務めていたわ」

「……じゅんいく? ……ジュンイク……荀彧!」

思わず箸を落としてしまった俺は悪くない。

てか、すげえビッグネームじゃねーか! 趙雲に続けて荀彧って

本当にやばいな。

というか分かつてはいたけど、やっぱり男ではないんだな。蒼天航路みたいにアイヤーさんって可能性も考慮してはいたが人生そんなに甘くなかった。それに荀彧って曹操に仕える前は袁紹のところにいたんだな。知らなかった。どのタイミングで曹操に仕えるんだっけな。

……まあいいや、とりあえず未来の王佐の才である荀彧に会えた事を喜ぼう。

「どうかした?」

「いや、なんでもあらへんよ。よろしゅうな、荀彧」

「よろしく頼む、荀彧殿。ところで文官を務めていたとはどういう意味だ?」

星が荀彧にそう尋ねる。

確かに先程の言い方だと既に辞めたような風にも聞こえる。だが、いくら袁紹に不満を持っても流石に酒の勢いで辞めてくるなんてあるのだろうか。

荀彧はバツが悪そうに目をそらす。

「……ついさつき辞めてきたのよ」

「マジか」

「……凄まじい御仁だな」

この人凄い、酒の勢いで仕事辞めおった。

「い、いや、確かに酒の勢いもあつたかもしれないけど、辞めた後のことは前々から考えてあつたのよ？ バカにしないでくれる？」

「じゃあ、この後どうするん？」

「曹操様のところに仕官しに行くわ」

なるほど、この時期に曹操のところに行くのか。

そういえば黄巾の乱が始まる前には荀彧いたような気がしたな。ということは黄巾の乱はもうそろそろという事だろうか？ あまり記憶が定かではない。年代なんて全く気にしてなかったからなあ。

「後任とかどうしたん？」

「袁家は腐っても名家だから文官なんて吐き棄てるほどいるわ。私一人が抜けたところで何ら問題はないわ。それにあんまり仕事任されてなかったし」

吐き棄てるほどいるって言い方も結構凄いな。というか荀彧という優秀な人材を見逃すなんて袁家はアホなのだろうか？

「ほー、それで、どうして辞めたん？」

「結構突っ込んでくるわね……まあいいわ。確かに袁紹は名家の出だけど、あんな無能な猿に仕えてちゃ今後始まるであろう戦乱の世を切り抜けることなんて到底不可能だわ」

……この子だいたい怖いよ。

「……中々の毒舌をお持ちのようだ。よほど袁紹殿が嫌いに見える。しかし、数ある諸侯の中で何故曹操殿を選ぶのだ？」 確かに陳留は

見事に治められていると聞いている。確か天の御使いという者が曹操殿の元へ降り立ち、其の者の意見により他には見られない斬新な改

革も始めているらしい……ふむ、確かにお主が仕官したいと思う気持ちもわかる気がする」

「なんやそれ……」

自分で聞いて自分で納得しやがった。

「とうか天の御使いつてなんだろうか。天使か？　天使が降り立ったのか？　でも天の御使いつて名前、流星にまずはなくはないだろう。」

「一応この後漢にも帝という天上の存在がいるし。場合によっては某ギヤグマンガみたいに『皇帝劉宏怒る』というタイトルの出来事が起こったりするかもしれない。まあ、どうでもいいけど。」

「そこで俺は荀彧の顔が赤く染まっている事に気が付いた。それを星が突っ込む。」

「ふむ、しかしそれだけが理由ではなさそうだな。顔が赤くなっているぞ？」

「ホンマや、他にもなんかあるんかいな？」

「うつ、あー、えーと、そ、そんなことはあんたらに關係ないでしょ！」

突っ込み過ぎなのよー！

「誤魔化したという事は何か疚しい事でもあるのだろうか。流星にそこまでは聞く気になれないが、気になる。まさか曹操に惚れてたりするのか？　それはそれで凄いけど。」

「そんで、どうやって陳留まで行くん？」

「……そうね、この後護衛を頼みに行くこうと思っただけけど丁度いいからあんた達に頼むことにするわ」

「近いうちに出んの？」

「ええ、もちろんよ」

「……個人的には文醜ぶんしゆうと顔良がんりようの二枚看板とか名将麴義きくぎなんかも見物してみたかったんやけど、まあええわ」

「早速俺たちの無料使用券を使うのか。張遼と趙雲を護衛に使うなんて、なんと贅沢な事か。光栄に思うがいい、ふっふっふ。」

「やけどそんな簡単にうちら信用していいんか？　自分で言つてなんやけど」

「別にたいして名も売れてない私をどうこうしてもあんた達に利益が無いし、もし私に何かあっても荀家が怒ってあんた達を地の果てまで追いかけるだけよ」

「ふっ、私達はお主を攫って売り飛ばそう、などという腐れ外道の様な事はせぬ。安心して護衛されるがよろしい」

「その通りや。別に荀家に恨みがあるわけでも無いしそんな事はせえへんよ。……後、名も売れてないの前に『まだ』が足りひんのやない？」

俺はキメ顔で荀彧にそう言う。

「張遼、あんたわかつてるじゃない。そうよ、私はこんな所で埋もれて様な女じゃないわ！ 曹操様の所でもっと活躍してやるんだから！」

荀彧はやる気に満ち溢れている。

可愛いから頑張つて欲しいと思う。

「ちなみにそのまま文官として続ける気なのか？」

「いや、私は文官としても優秀だけど元々軍師志望なの。曹操様の所では軍師としてもやっていくつもりよ」

「がんばりやー、でもまずは仕官出来るかどうか肝やな。いつ出発する気なん？」

詳しい時間を聞いていなかったののでついでに聞いてみる。

「別に今からでも間に合うと思うけど……明日の朝出発にするわ。あんた達も私もお酒飲んじやってるし」

それがいい、車校に通っている頃も指導員に「酒飲んでいいことなんかひとつもない。酒飲んで調子が上がるなんていうのは真っ赤な嘘だ」と散々言われてきたから、こっちでも仕事前は絶対に飲まない様になっている。

まあ、こっちは前世と違いアルコール度数なんてたかが知れてるから滅多な事はないとは思うけど。1%でどうやって酔うというのだろうか。

「妥当やな。なら荀彧も今から飲み直そうや！」

「確かに。互いをもっと知って親睦を深めようではないか」

「いや、まだ二日酔いが少し残ってるんだけど……」

こんな酒で酔うなんてどんだけ飲んだんだろう。もしくは酒に弱いとかかな？　でもそれはそれで羨ましい。この身体どんだけ酒飲んでも酔うことがないから酔えるということに少し憧れを感じる。俺が飲んでもせいぜい少し気分が良くなる態度だ。マジで1%じゃ全然酔えないのよ。

「やったらうちの話し相手でええから。うち一人じゃこいつの相手きつついねん」

「ほほう、霞。それはもつと私と話したいという事だな？　いやあ、そこまで思われるとは私も罪な女だ」

「うっさいわぼけ」

「……酷い御人だ」

星にはこのくらい言わないと効かないだろう。落ち込んでる様に見えるがこれは演技だ。少しずつ分かる様になってきた。

「んー、話し相手くらいだったら構わないわ。別にやることなんてないし」

「よっしや！　店主きーん！　酒追加頼むわー！」

「……ちよっと」

「まあまあ、先はまだ長いんや。少しくらい大丈夫やて」

「……それもそうね。なら私も少し貰うわ」

「店主殿、私もメンマ二壺追加で」

「お前は自重せんかい」

酒の席はまだまだ続いた。

四話 陳留と張遼

「張遼一番乗り！」

「あいつどうしたの？」

「偶にああなる。気にするな」

あれから翌日、俺たち三人は朝早くから☒を発ち、のんびりと馬車に乗りながら陳留へと赴いていた。理由はもちろん依頼者である桂花けいふあの護衛の為である。

真名まなについてはあの後飲みまくった後に交換した。桂花の方から教えてくれたので恐らく俺たちを信頼出来る人間だと思ってくれたのだろう。その際、桂花からは「べつ、別にあんた達を信用した訳じゃないんだからっ！ 勘違いしないでよねっ！」というツンデレじみたありがたい御言葉も頂きました。とても可愛かったですご馳走様でした。

ちなみにだが、先程の俺の言葉は単純に三人の中で最初に陳留に着いたという事を表しているだけだ。まあ、着いたというか門をくぐっただけなのだが。入る際、鉄鎖を持ち合わせていなかったのも、仕方なくそこらへんに落ちてた木の棒を鉄鎖に見立ててブンブン振り回していた。所謂リスペクトという奴である。

……いや、よく考えるとマジで鉄鎖でやってたら俺捕まってたわ。どっからどう見ても街に単身で乗り込んだ馬鹿な盗賊じやん。俺はバカか。バカか俺は。

どうやら割とどうでも良いところで危ない橋を渡ってしまった。

陳留の感想としては、本当に良く治められていると感じた。ここに来るまでもちよいちよいい色んな町を見てきたが、ここまで治安が良い土地は初めてだった。

活気があり、物価も手頃、そして何より浮浪者が殆どいない。何処の土地でもやはり、職が無くて貧しい者が出るのを防ぐ事はとても困難な事だろう、と思う。知らんけど。

えんしよーさまが治める☒も物は豊かだが物価は少し高めで浮浪者は結構な頻度で見かけた。まあ、見かけたとは言ったがそういう輩は大概裏道とかに潜んでいるので表通りで見かける事は殆どない。

ともかく俺が言いたいのは、この町の笑顔と物価が曹孟徳という人物が如何に敏腕太守様であるかをよく示している、という事である。

「……なんでこいつしたり顔で頷いてるの?」

「偶にああなる。気にするな」

「お前らええ加減にせえよ!」

人が折角穩便に流してやったというのに。俺にも堪忍袋というものがあるのだ。次やったら星には全力の耳ピンを喰らわせてやる所存だ。しかも完全なる不意打ちで、唐突にだ。今にも星の泣き顔が眼に浮かぶわ! けけけけ!

「——はっ! 殺気!」

「そのまま氏ね」

桂花には何をしてやろうか。……まあ、桂花は可哀想だからほっぺたむにむに半刻(一時間)コースで許してやろう。むしろやらせて欲しい。

「——はっ! 急に寒気が……」

「桂花、大丈夫か? ぽんぽん痛いんか? うちが背負つたらるか?」

「?」

「……あんだ、本当に私が歳上って理解してるの?」

「桂花はうちより5歳下やろ?」

「2歳上よ!」

「……またまた、そんな分かりやすい冗談はええって」

「張つ倒すわよあんだ!」

「それよりも扱いの差に苦言を呈したいのだが」

桂花は「これだから巨乳は……!」と鼻息荒く捲し立てた。関係なくない?」

「そう言えば、あんだ達はこれからどうするの?」

「どう、といえは?」

「そのまんまよ。ここできさよならなのか、街に滞在するか……それと

も曹操様の元へ士官しに行くか」

そう、問題はそこだ。俺は主人を探しているとは言ったが絶対に誰かの下につきたいという訳ではない。人生なんて楽しんだもん勝ちなのだから。成るように成る。星はなんて言うだろう。

「星はどないする気？」

「私は霞について行こう。学ぶ事もある故」

「そーかい」

放り投げやがった。考えたくないだけじゃないのかこいつ。

しかし、ふーむ、どうしようか……俺としては曹操を一目でいいからチラツと見てみたい。

乱世の姦雄、はたまた世が世であったなら治世の能臣とも言われたあの曹操。噂でしか聞いた事が無いからどんな人物なのか分からないが、町を見る限り凄い有能だと思う。だとしても士官はまだお預けかな。

俺には色々な英雄達をこの目で見てみたいという夢がある。あの時活躍した武将が、実はこんな人物だった、本当に記実通りの人物だったなど、フアンの俺からすればすごく胸熱だ。直接関わるのは怖いから嫌だけどちらつと目にするくらいなら大丈夫だよな？

俺は色々吟味しながら星に返答を返す。星が町をキョロキョロと興味深そうに見渡す様子を見ると、もしかしたら曹操に興味が湧いてきたのかもしれない。

「仕官はせえへんよ。その曹操サマがどエライ輩やったら嫌やし、凄いやつたとしてももうちょうい他の所も見て回りたい」

「ふむ、一理あるな」

二人でうんつんと頷き合うと桂花がクワツと目を吊り上げ、俺達の方を睨む。

「はあ？　もしかしてあんた達曹操様を侮辱してるの？　曹操様をそんじよそこらの有象無象な諸侯共なんかと一緒にしないで欲しいわー！」

「侮辱するつもりはあらへんけど……桂花は曹操サマ見たことあるん？」

「前に一度洛陽で見掛けたことがあるわ。まだ曹操様が北部尉の頃ね」

「おっ、あれやろ！ 宦官の叔父を叩き殺したやつやろ！ 生で見たかったわ」

曹操は洛陽北部尉に着任すると、厳肅に誰一人として例外なく、決まり事を破る違反者へ刑罰を行ったと聞く。

それは例え豪族や皇族の類であっても。

その中で特に有名なのが先程口に出した霊帝に寵愛されている宦官である。〃十常侍〃蹇碩の叔父を打ち殺した話だろう。これによって曹操を疎んじた権力に物を言わせて甘い蜜を吸う濁流派の宦官などは曹操の処刑を画策した。

しかし、曹操は全くと言つていいほど悪事を働いておらず、霊帝を傀儡にして洛陽を牛耳っている高位につく宦官の十常侍ですらろくに手を出せずに逆に推挙して榮転させ、洛陽から遠ざけるくらいの処置しか出来なかったとの事だ。まんま蒼天航路である。

「へえ、よく知ってるわね。言うなれば蹇碩の叔父は他の者達への見せしめね。恐らくここまでやってのける事ができる人物は浅慮なド低脳な害虫を除けば大陸中でも曹操様だけだわ！」

言い切った桂花はとても晴れやかな顔をしていた。それほど曹操の事を敬愛しているのだろう。

「ほう、桂花にそこまで言わす曹操殿に私も興味が向いてきたな」

「あら？ 星は仕官希望に変更かしら」

「ふっ、残念ながら私は先程霞しほに任せると言つたばかりだ」

星はいつもの不敵な笑みを桂花に向ける。胡散臭いとも言える。

「そういえば星はうちと出会わんやったらどこに行くつもりやったん？ やっぱり歩いてた方角的に公孫贇か？」

正直公孫贇については劉備の学友という情報しか知らない。影が薄い人物なのだろう。

「然り、公孫瓚殿が治めている土地へ客将として仕官していただろう。丁度その辺りで路銀が尽きる予定だったしな。だがあそこはいい政治をしているというより、極々普通の、なんの特徴もない平々凡々な

政治を行っている」と聞いている」

「……嫌らしい言い方やな。普通の政治つちゆうことはいい政治って事やないんか？」

「さあ？　けれど普通という事は進展も衰退もない、つまらない政しか出来ないという事じゃないかしら？　あ、でもあそこは白馬義

従という騎馬隊が有名っていうのは聞いたことがあるわ」

ふむふむ……聞いた事すら無いな。感じからして白馬の騎馬隊の様だが、他にも何か特徴とかあるのだろうか。

「ふむ、それは私も聞いた事があるな。あそこは烏桓と隣り合わせの土地だからよく小競り合いが続いている。その為平和な内陸の諸侯達と違い、経験豊富で屈強な兵に仕上がっているらしいな。それによつて他方からは北方の勇将と名高いと聞いている」

「へー、凄いやん。じゃあ白馬で統一しとる理由はなんなん？」

「さてな、こればかりは私にも分かりかねるな。大方馬が好きとかカッコいいとかそんな理由だと思うが」

見栄っ張りなのだろうか。まあ、確かにカッコいいとは思うけどね。

「はー、結構しようもない理由やな。あ、でも白馬やったら確かに印象に残りやすいし影が薄そうな公孫賛の場合それはそれでええんかもな」

「ふむ、確かに」

「ほら、無駄口叩かないでさっさと行くわよ」

桂花は呆れ顔でそう言うところそくさと曹操が居る城へと歩いて行く。お前も話していただろうと思わないでも無いが、追求する必要もないので俺たちは桂花について行く事とした。

☆☆☆

「……はあ!?　　なんですって!?!」

桂花は激怒した。先程まで軍師として頑張ると意気込んでいたのだが、仕官する前に出鼻を挫かれてしまったのだ。その理由としては、どういう訳か曹操は現在軍師を募集していないという対応の者からの言葉だった。

「まあまあ苟賤、落ち着こーや、な？　怒鳴ったってしやーないやん。それで、なんで曹操サマは軍師要らん言うてるん？」

「軍師が要らない、というより軍師に考えさせるより御自分でお考えになる方が効率が良いのだ。臣下としては悔しい事にな。せめて己に追隨する程の実力を持たない事には仕官は認めないと仰られた」「疲労で倒れるんちゃうんか？」

曹操は軍師に恵まれてないんだな。でも軍師が考えるより自分で考えた方が良いのが出来るっていうのも凄いな。武の腕前も相当なものと聞いているし、出来れば手合わせ願いたいものだ。

なんて事を考えながら俺と星は桂花の耳元へ口を持っていき、目の前の曹操軍の人に聞こえないようにコツソリと話す。

「なあ、桂花……提案なんやけどやっぱり文官として入った方がええんやないか？　そこでアツと驚く凄くことを曹操の目の前でやって大出世、つてのはどや？　桂花やったら余裕やろ」

「私も霞と同じ事を思っていた。曹操殿が目を見張るような素晴らしい策を披露すればいい」

「まあ、単純だけどそれが一番良さそうね。軍師が要らないというのなら軍師を必要な存在と認識させればいいだけだわ！」

「その意気や！」

どうやら気を持ち直してくれたようだ。桂花が機嫌を損ねると結構面倒なんだよな。本当に俺より年上なのだろうか。

「おーい、秋蘭ー」

「……察しろ北郷。今は仕官希望者の対応中だ」

「あ、そうだったのか、悪い」

建物から一人の男がやって来た。艶のある黒髪の爽やかなイケメン君だ。見た感じ人受けも良さそうだし、何というか……非常に敗北感を感じる。さぞやおモチになるのだろうか。氏ねじゃなく死

ね。

「……えーと、何でそんなに俺を睨んでいるのかな」

「おおっと、すまんすまん」

「あ、いや、君じゃなくて……」

「え？」

俺のことかと思っただが、どうやら違うらしい。北郷とやらの視線の先を追ってみると、確かに凄まじい形相で北郷を睨む小さい女の子がいた。勿体ぶらず言うところ桂花の事だ。それにしても凄い顔だ……。表情筋どうなってるんだろ。

「荀彧、どないしたん？ あいつがなんかやったんか？」

「何かやった……っていうなら最初からやってるわね」

「マジで？ まさかこいつ……うちの荀彧をイヤラシイ目で!？」

「見てねーよ！ 君何言っちゃってんの!？」

北郷なる人物は驚きのあまり鋭いツツコミをいれる。

「うるさいわね！ この有罪人！」

「なっ！ 俺が一体何をしたっていうんだ！」

「あんたが男ってだけで有罪なのよ!!」

「思った以上に理不尽極まりなかった！」

「なんや、この子と知り合いや無かったんか」

「こんな男なんか知らないわよ！ 後喋るなって言ったでしょ！ 孕

んだりしたらどうするのよ！ 後霞！ 私はあんたのものじゃない

わ！ 曹操様の物よ！」

「は、孕むって……」

北郷がどうすればいいという顔でこちらを見てくる。俺も知らん。色々ツツコミどころがあるが、どうにも桂花は冗談で言っているわけではなさそうだ。星も突然の桂花の剣幕にとても驚いている。

この険悪な雰囲気、流石に看過出来なくなった俺は心を鬼にして桂花を咎める。

「——なあ、荀彧や」

「……なによ」

真剣な面持ちで俺たちは向かい合う。しかし、これだけは言わねば

ならない。

「——人前でうちの真名呼ぶのやめてや。あんまり晒しとうないねん」

「それ今この段階で言うべきことか!？」

途端桂花はバツが悪そうに顔を俯かせる。

「……それは悪かったわね、気をつけるわ」

「いや、うちも最初に言やあよかったわ。すまん」

「ふむ、そうだったのか。一言言ってくればやめたものを」

「自分も嫌やから人にするのもやめよう思うてな。それにあん時はええ気分やったから」

「……あれ？　俺もしかしてスルーされた？」

「……するー?」

星にも最初に言っておけばよかったな。ともあれ、分かってくれたならばそれでいいのだ。特に真名に対して特別な感情を抱いているわけでもないのだが、あまり呼ばれ慣れていないので人前だと少々気恥ずかしく感じるのだ。これまでは幼馴染や家族にしか呼ばれてなかったからな。

「……秋蘭、俺も人前で真名呼ぶのやめたがいいかな?」

「いや、気にしなくて良い。ところで北郷、お前はこれからやることがあるんじゃないのか?」

「あつ、そうだ。華琳の所へと行かなきゃいけないんだ。それじゃあ」
「ああ」

そして北郷なる人物は桂花に睨まれながら城の中へと戻っていった。結局あいつは何者だったのだろうか。……まあいい。どうせ士官する気もないし、会う事も殆どないだろう。

「……そういえば自己紹介がまだだったな。我が性は夏侯、名を淵、字を妙才という」

「えっ? あんたが夏侯淵やったん!？」

さらっと出てきた重要人物。まさか着いて早々こんな重鎮に会えるとは思ってもいなかった。確かによく考えてみれば陳留の見回りをしていた兵とは服装が全く違う。それに明らかにモブではない雰

困気を醸し出し出しているのも感じる。そろそろ 美人&可愛い子 有名 人 という定義を作っても良いんじゃないかなろうか。

「私を知っているか。名はあまり売れてないと思っていたが」

「何言うとんのか。かの夏侯嬰の末裔やないか！ まあそれはいいとして、うちもまだ名乗つとらんかったわ。うちは張遼、字を文遠や！」

「そして私は『常山の昇り竜』こと趙雲、字を子龍。気軽に趙雲とでも呼んでください」

「……ほう、『武神』に『神槍』か」

「むむ！ 『神槍』とは私の事か!？」

「あ、ああ」

見るからに星が目を輝かせて夏侯淵へと迫る。その二つ名は初めて聞いた。というか俺も武神よりそんな感じの二つ名が良かったな。

「して、貴殿らは何故この地へ?」

「この子のお守りや」

ぼん、と桂花の頭もに手を乗せるが光の速度で振り払われた。

「何がお守りよ！ ただの護衛でしょうが!」

「そうとも言う」

「そうとしか言わないわよ!」

桂花が捲し立てるも、俺は気にせず夏侯淵と会話を続ける。

「んで、この子が軍師になるのがあかんのやったっけ?」

「ああ、幾ら名家の出といえども、我が主人の命だ」

「じゃあ、文官やったら?」

「試験に合格さえすれば歓迎するさ」

夏侯淵は桂花を見つめる。対する桂花も覚悟を決めた顔付きで夏侯淵と向き合い、そして口にした。

「——やるわ」

「……では私についてきてくれ」

「よっしゃ、頑張れや! その間うちらは適当にぶらぶらしよくわ」

「うむ、朗報期待しているぞ」

「当たり前よ」

桂花は受かるだろうか。少し心配だが、集中し始めている桂花の邪魔をしてはいけない。そう思い街へと戻ろうとした矢先、夏侯淵から再び声を掛けられた。

「いや、貴殿らも長旅で疲れただろう。ここでゆっくりとしていく方がいい」

「あー、気持ちだけでもろとくわ。そない疲れた訳やないし」

「疲れとは自覚の無いところで溜まっていくものだ。なに、街の観光を楽しみたいのなら明日でも良かろう。逃げはせんよ」

「……まあ、それもそやな」

「夏侯淵殿の言葉も一理ある」

「では案内しよう。一緒についてきてくれ」

そして俺たちは夏侯淵に連れられて城の中へと入っていった。